夏目漱石の小説、「こころ」は、「先生」を中心とした、「私」の手記である。従って、この小説は「私」が話し手の三人称限定視点に語られ、主人公の先生の心情が明確にわからない。このため、物語の進行には脇役である「私」や「先生の奥さん」などの役割が重要である。この文では、先生の妻、「静」の人物描写について、「私」から直接な描写、そして奥さんと先生との関係の描写を通じ、近代日本の女性像の変化につく彼女の人物像について分析する。

この物語の時代的設定である明治・大正時代では、西洋的な教育・文物により、女性につく新たな価値観が現れる。現代的・西洋的な生活をする先生の家で、静は、知的で理性的な自分の性格と、先生の理想の妻、つまり伝統的な女性であるべきという責任感の間で、ジレッマを感じていると見受けられる。

「私」は奥さんの言動を密接に描写し、様々な感想を提供してくる。十八章、奥さんと二人きりの会話の場面で、彼は「奥さんの態度が旧式の日本の女らしくないところも私の注意に一種の刺戟を与えた」と述べ、彼女の考え深い、観察的なところを指摘する。また、女との付き合いが少なかった「私」が「奥さんに対した私には（変な反撥力）がまるで出なかった」理由は、彼女の話し方が理性的であるから、哲学科の彼が普通に話し合うことできたと考えられる。彼の「先生の批評家および同情家として奥さんを眺めた」と言った奥さんへの態度は、彼女の鋭い観察力や思考力を感じたからであろう。

一方、次の章では、「奥さんは私の頭脳に訴える代りに、私の心臓を動かし始めた」と、奥さんの態度が感情的に変わったことが描写される。また、「奥さんは最初世の中を見る先生の眼が厭世的だから、その結果として自分も嫌われているのだと断言した。（…）そっと胸の奥にしまっておいた奥さんは、その晩その包みの中を私の前で開けて見せた」の部分で、奥さんが先生の価値観について「推理」したことが「事実」として証明できない事態を、「そっと胸の奥にしまっておく」ことに、感情的に捉えている。要するに、奥さんは、先生の厭世的な性格について、論理的に分析してから、感情的な結論を出している。このゆえ、私は、奥さんについて、伝統的な手動的な女性として接するか、それとも知的な現代的な女性として議論をするか、ということに迷っていると考えられる。

このジレンマは「私」だけではなく、奥さん自身も抱えていると思われる。「議論はいやよ。よく男の方は議論だけなさるのね、面白そうに。」と言った彼女が、すぐに次の場面で「私からああなったのか、それともあなたのいう人世観とか何とかいうものから、ああなったのか。隠さずいって頂戴」と議論を先導しいる。彼女は、先生が変わった理由を知りたくとも、そのような追及は伝統的な「理想的な女性像」に反しているから、躊躇している。結局、彼女は、先生みたいな哲学的で理性的な夫をもち、西洋的な影響を受け、知的な性格を持っているが、先生に「理想の妻」でいられるよう、自分の性格を抑えてると、察すられる。